



本学図書館が所蔵する佐藤顕理の著作と翻訳書

のでしたが、日清戦争の講和事務に関与したのちには大きな変化が見られます。その代表的なものが明治二十九(1896)年に刊行の“Agitated Japan”でした。これは島田三郎による『開国始末 井伊掃部頭直弼傳』の英語翻訳書で、幕府の開明派を外国に知らせようとしたものでした。この書物の刊行からは、明治政府の樹立から約30年を経て漸く社会環境が安定し、国民が徳川幕府の外交政策を冷静に回顧できる状況になっていたことを伺うことができます。

次に、日露戦争が終わった明治四十一年(1908)年には、『日本外交の先覚・堀田閣老傳』と同時にその英語版“Lord Hotta, the pioneer diplomat of Japan”を刊行しました。これは、井伊と同様に日米通商条約の締結に関わった老中、堀田備中守正睦を評価したものでした。

さらに、大正九(1920)年には英文の勝海舟伝“Value and merit of Count Katsu who saved Japan from Civil War”を、また大正十一(1922)年には勝と共に江戸を戦火から回避させた西郷隆盛の英文伝記“The life of elder Saigo”をそれぞれ別の英字新聞に連載しました。

この時期に顕理が著述し、また英語翻訳した伝記は西郷のものを除いて全てが幕臣でした。因みに明治三十一年(1898)には徳川慶喜の明治天皇への拝謁が叶い事実上の復権が成りますが、これと前後して徳川系人物の顕彰が続きました。前述の石塚氏は井伊大老傳を翻訳した顕理の心境を、二君に仕えたことと幕府開明派をPRすることでの「バランスをとりたいたいという心理」と述べています。加えて推測すれば、明治政府の政策で国際的な地位が高まる中、旧幕

臣として徳川幕府が断行した開国や諸外国との通商条約締結の妥当性を強調したいと考えていたとしても不思議ではありません。

しかし、顕理は徳川系人物の伝記を刊行する合間に『日本皇室論』の英語翻訳本を出版するなど、知識人として立場の均衡を保っています。

■国際ジャーナリストとして

顕理は明治二十四(1891)年頃に約1年の間でしたが、既出の伊東が社長を務めていた東京日日新聞で記者として筆を揮っていました。その経験は大きく展開し、農商務省の商品陳列館長を退任した明治三十八(1905)年頃からイギリスのロイター(ロイター)とアメリカの連合通信社(AP)の東京通信員になっています。さらに、大正三(1914)年に国際通信社の創設に参加して初代編集長に就任し、のちに顧問を務めました。

この年、顕理は日本の政党の進展を英語で述べた“Evolution of political parties in Japan”を刊行し、高い見識を示しました。また、勝伝と同年の大正九(1920)年には英文の自伝“My boyhood”を公刊して少年時代を振り返り、反薩長の意気込みで英語を身に付けて上京するまでを紹介しています。しかし、東京では柔軟に活動し、やがては当時の日本を代表する国際ジャーナリストとしての地位を築いたのです。

一方、顕理が残した著作や翻訳書、あるいは論文などを併せると主なものだけで20点を越えます。その殆どが英語に関わるものと英語で書かれたものでした。しかし、取り上げられた内容は、就いた職業や時どきの世相に応じて変化しており、自ら主張していた「使える英語」のあり方を実践していたのではないのでしょうか。

わが国が徳川幕府崩壊による様々な影響を乗り越えて近代化を成し遂げていく中で、自分を古いタイプの人間としながらも文化や歴史を海外へ発信した佐藤顕理。大正十二(1923)年の関東大震災の約2年後に世を去りますが、忘れられてしまうことが惜まれる人物です。

主な参考文献と脚注

- (1) 本書の副題は「佐藤顕理伝」。“My boyhood”を共同通信社で重責を担った石塚氏が翻訳し、解説を加えたもので顕理研究の希少な資料である。密門会出版部から1999年に刊行された。
- (2) 竹中龍範著「佐藤顕理とその『英語研究法』」(兵庫教育大学言語表現学会「言語表現研究」第17号 2001年。64-70頁。)

おく まさよし(司書・図書館事務長)